# 俺がパーティーを辞めさせられた理由が特殊すぎるんだが。

ガラクタ山のヌシ

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある冒険者の男がパーティーを抜けるよう嘆願される。

まぁ、よくあるお話。

# 目　次

俺がパーティーを辞めさせられた理由が特殊すぎるんだが。 ―― 1
第2話 ―― 4
第3話 ―― 8
第4話 ―― 11
第5話 ―― 14
第6話 ―― 16
第7話 ―― 19

# 俺がパーティーを辞めさせられた理由が特殊すぎるんだが。

俺は魔法剣士ゼニス。
熱血漢の男友達と、二人の女性メンバーと、とあるパーティーを組んでいたんだが…。
「悪いが。キミには今日限りでパーティーをやめてもらいたい」
そう言われたのは、いつものようにクエストを終えて冒険者ギルドに報告に向かった時のことだった。
「えっ？なに急に？どしたの？」
なるたけ軽い感じでパーティーのリーダーに聞いてみる。
もしかしたら聞き間違いなのかも知れないからだ。
「実を言うと…キミがパーティーにいることに、とある問題があると、俺たちは気づいた。気づいてしまったんだ…」
神妙な表情で、申し訳なさそうにそう言うリーダー。
「このままずっとキミがこのパーティーにいると…」
「いると…なんだよ？」
リーダーは少し口籠るが、その数秒後に意を決したように俺に告げる。
「俺たちの物語の山場が無いんだ!!」
やまばっ!?
「キミの支援魔法は最高さ。正直助かってるし、本当にありがたい!!」
「だったらなんの問題も…」
「だから問題なんだ!!」
俺の言葉を遮るように叫ぶリーダー。
え？コイツこんなヤツだったっけ？コワ～…。
「もし俺たちの冒険が物語にまとめられても見ろ!!『魔法剣士の支援魔法のおかげで全員無傷で冒険を終えました』なんて、なんの盛り上がりもないでしょうが!!」
「いや、そこは多少後世の人たちがなんかうまい具合に脚色ってい

か、なんか苦戦させてくれたりなんか…」
「ねぇよ!!何故なら俺は嘘がつけないからだ!!」
あぁうん。バカ真面目だもんねキミ。
そして、他のパーティーメンバー二人はメニューを見てどれにしようかなぁ～なんて呑気なことをしている。
まったく…美少女じゃなかったら今飲んでるお茶をコッソリ飲める程度に熱くしてやるとこだよ全く…。
「大丈夫!!キミが居なくなったからって、俺たちはキミの悪い噂を流したり、後々になって逆恨みしたりなんてしないから!!」
さっきまでとは打って変わっていい笑顔を向けてくるんだけど。
俺が人間不信になったらほぼ百パーコイツらのせいなんだけど。
あとあの二人、この状況でウェイトレスさんに注文してる。
え、とりあえずこっからここまで全部？
どっちもガワのいい美少女じゃなかったらこっそり足踏んでたよ？軽く。
「いや、何を根拠にそんなこと言ってるのさ…だいたい、人の心なんて正直その時の気分とか状態によりけりじゃ無い？」
「だからほらッッッ!!魔法契約書も用意してあるんだ」
俺のその質問を待ってましたと言わんばかりにテーブルにそっと置かれるのはとある文書。
俺はそれを手に取って確認する。
そろそろ注文した品が届いてる。
アレだけの量を一度に運べるとかすごいなぁウェイトレスさん。
「へ？なんでそんな仕事早い…ってコレ!!S級契約書じゃん!?」
「そう。ここに記された契約を破った側はこの世の全ての苦痛を味わったのちにゴミクズのように死ぬという、あのS級契約書だ」
隣の二人もウンウンって頷くなよ。
そして話に加わるんならせめてその骨付き肉から手を離そうね？
美少女じゃなかったらその肉の食える程度にパサパサしたところを三倍にしてやるところだよまったく…。
「うんまぁ…キミら全員の名前が署名されていることからキミらの本

気度合いはわかったけどもさぁ…」
　改めて差し出された契約書をまじまじと見る。
「けど、人間って普通安定する方を望むと思うんだけども…どんだけスリルに命懸けなわけ？」
「馬鹿野郎ッッッ!!そんなんで燃えるような旅ができるか!!」
「じゃあ今後はこっちもなんかいい感じに加減するし…」
「ダメだ!!キミの本気の支援魔法を知ってる分、なんかモヤモヤするからっ!!」
「うん。キミ自分が今どんだけメチャクチャなことといってるかわかってる？」
　めんどくせぇなぁコイツ。
　っていうか、今にして思うと支援魔法しか使うなって言ってたのアレ、自分達の活躍の場が欲しかったってだけか？
　いや、コイツに限ってそれは無いかぁ…。
「無論、このパーティーでキミが一番強いのは知っている。戦闘センスも魔法の才能だって頭一つ抜け出ていると言っても過言では無い!!」
　グッと握り拳を作った熱弁するリーダー。
　他の二人はテーブルに並んだ料理をむっしゃむっしゃと食べている。
　もう興味無くなったのかなぁ？
「だから…だからこそッ!!俺たちはキミから…卒業しなければならないッッッ!!」
　なまじ褒めるニュアンスなため、なかなか否定しづらい。
「うん、パーティーから追い出すのを体よく卒業っていうのやめな？」
　あとあの二人はデザートまで頼んでるんだけど。
　まったく、美少女じゃなかったら……。
　こうして俺は、とある冒険者パーティーから除名されることとなったのだった…。
　あっ、活動資金の半分を退職金代わりに貰ったから、そこは良かったかなぁ…。

# 第2話

「さぁて、これからどうしよっかなぁ～」
俺は取り敢えず貰った金を持って街中を歩き回る。
正直ずっとアイツらと冒険者やってるつもりだったから、今後のビジョンってのがよく見えん。
商人を初めて一旗上げるってのもツテやら専門の知識やら無いから無理だし、かと言ってノウハウを教わるってことになると、その過程で所持金をたっぷりと搾り取られそうなんだよなぁ…。
魔法の師匠は世界を旅する人だからどこにいるのか皆目見当もつかないし。
かと言って冒険者になるのを猛反対されたのを押し切って出て来た手前実家も頼れんし…。
そもそも冒険者ってのは、クエストの選り好みさえしなけりゃあその日の飯を食うには困らない程度の収入くらいは得られるモンだ。
ただ安全面のためか、どんな簡単な内容であっても大抵はパーティーを組んでいる前提である場合がほとんどな訳で…。
かと言って新天地で心機一転しようにもここの主な交通手段は馬車頼み。
歩きで一番近い街や村は少なく見積もっても三日はかかる。
移動魔法は魔法師会によって牛耳られ、登録外の人間には少なく無い罰金が課せられる。
そして俺は当然そんなモンには入ってはいないわけで…。
かと言って、クエスト以外でこの街の外にすぐに移動するのは難しく、勝手に出ていけばペナルティも大きい。
そんな俺にいま出来ることはと言えばだ…。
「くそぅ!!あんな奴ら、街中でうっかり転んで膝小僧を擦りむけばいいんだ!!」
俺はなんとなく酒場に来ている。
まぁ今は昼なので、酒は置いていない軽食屋としてやっているんだが。

「お客さん。ジュースで酔えるなんて凄いねぇ～」
「真っ昼間から飲んだくれるほど落ちぶれちゃないやい!!」
っていうか…考えてみたら、そもそも冒険譚を纏められるほどの冒険者なんて本当にごく一部の凄腕だ。
まぁ確かに？リーダーのフィジカルは目を見張るモノはあるし、鼓舞や指揮のタイミングもバッチリでリーダーシップもあるし？前回ロクに話に加わって来なかった美少女二人だって方やエルフ族の優れた弓使いと方や教会のエース格なんて言われてた凄腕クレリックだけども…。
アレ？マジでアイツらなんとかなるくない？
「と言うか、そこまで未練があるんなら戻るようにお願いしてみても…」
「いいよ別に…今はただ愚痴りたかっただけだし…」
店主にめっちゃ気を遣われてる…。
そう思っていた矢先、その店主がぽん、と手を叩く。
「あっ、そうだ!!それじゃあ、あそこに行ってみればいいんじゃないかい？」
「あそこ？」
俺はムクリと起き上がり、視線で話の続きを促す。
「ああ。最近出来たっていう光喫茶だよ」
あぁ～…光喫茶ねぇ～…。
「なぁんか怖いイメージあるんだけど…」
「そうかい？私も行ってみたけど、出来たばっかで綺麗だし、防音魔法もバッチリで、思いのほか居心地よかったけどねぇ…」
「ふぅ～ん…」
まぁどうせ暇だし、行ってみるかなぁ…。
やがて夕方となり、俺がいた店も酒場としての準備のために出ることとなった。
ごちゃごちゃとした道を抜けてやっと見つけた店に入ると、きちっとした服装の女性が受付に立っていた。
こちらに気づいた女性はニコリと微笑む。

「いらっしゃいませ♪当店のご利用ははじめてでございますか？」
「あぁはい…恥ずかしながら…」
「いえいえ、よろしければ説明差し上げますが…いかがいたしましょう？」
　へぇ～、助かるなぁ。
「あ、お願いします…」
「かしこまりました」
　丁寧にお辞儀をすると、受付嬢は説明をはじめる。
「当店は光喫茶…正式名称『光通信魔法許可店』でございまして…」
「光通信魔法…って、あのですか？」
「はい」
　光通信魔法…それは光魔法をああしてこうしてああやった結果出来たと言う魔法のことだ。
　説明が雑なのは本当にそう伝わっているからで、決して俺の語彙力が死んでいるわけでは無い。たぶん。
「周辺諸国にある各協会には、御神体とされる大結晶がございますでしょう？」
「ああ、ありますねぇ」
　前に一回、都の大神殿に行ったけど、本当にデカい結晶の塊が鎮座していたのが今でも印象に残っている。
「あの大結晶から魔力をヌッ＝ス…つまりは特別な儀式を用いて他の小さな水晶に移すことで、前者はサ・バァ、後者はルゥタと呼ばれ、魔力によって接続されることになります」
　うんうん。何故だろう。すごく冒涜的な気がして来たが、まぁ気のせいだろう。
「部屋に据え置きの端末型水晶がございますので、それに魔力を流していただければ、簡単に繋がれますよ♪」
「それで、お幾らになるんでしょうか？」
「そうですねぇ～、まずは一時間コースで如何でしょう？」
　ススッと時間の書かれた紙を差し出される。
「へぇ、結構安いんですね」

「はい♪みなさんそうおっしゃいますね」
ソシテ沼ニハマルノデスガ…。ボソッ…。
「うん？今何か？」
「いえいえ♪それではコースはお決まりですか～？」
俺は取り敢えず一番安い部屋で短めの一時間コースを選び、渡された鍵の部屋へと向かう。
「うわっ…狭ぁ…」
部屋には椅子と、そしてさっきの説明にあった端末型水晶がぽつんとあるくらい。
そして部屋の広さは本当に人一人入れるくらいだ。
座った状態で両手を広げたらひじのあたりで壁に遮られてしまう…。
けどまぁ、これでもいいのもしれない。
俺は念じて、魔力を込めた手で水晶に触れる。
そうして出て来たページには…。
「二分の一チャンネル。またの名を０．５チャン…？」
そう表示されていた。

# 第3話

「ふむふむ…主に質問形式であったり、ア＝ンカーとか言う遊び、困った時に助けを求めたり、自分語りなどに使われるツールなのか…」
板状の水晶を直接触ると映り出した映像がスクロールされたり、短く触るとそこに行けるのかぁ…。
便利だなぁコレ。
しかも…とあるスレッディ（略称スレ）では…
『イッチ、置き論破されてて薬草生えるわぁ』
『草ァァァ!!』
『毒草置いとくわ』
などと言ったじゃれあいなども散見される。
ちなみにこの特殊な口調は『モーコ＝ヴェン』といって、かつての偉人に倣った伝統ある物言いだとかで、普段使いするのは流石に不敬がすぎるとのことらしい。
なお、魔法師会は嘘か真か内輪だけの時は大抵この口調なのだとか。
エリート連中はスゲェなぁ…。
そんなこんなで、俺は暇つぶしも兼ねて色々とスレを巡回していたところ…。
『さっき他のスレで見たけど、国王がスレ立てしてて薬草生えますよ』
などというコメントを発見した。
マジか…と思い、検索をかけてみると…。
「え～っと、国王国王…って」
『一国の王だけど質問ある？（画像付き）』
いやいや、騙りだろうと首を横に振り、画像を開く。
そこには、王家の紋章の入った刺繍の服を着た人物がドヤ顔を決めていた。
陛下ァァァ!?
何やってんすかァァァ!?
「ったく…前会った時もけっこう茶目っ気のあるお方ではあったが、

まさか０．５民だったとは…こんなこと宰相に知られたら…ん？」
『一国の宰相だけど質問ある？（証拠アリ）』
宰相閣下ァァァ!?
何やってんすか!?
「あぁ～、でもそういやぁ国の上層部の人らは報告なんかを速やかに済ませるために特別に端末持ってるとかなんとか、聞いたことあるような…」
ええとコメントは……。
『もう終わりだよこの国』
『むしろねらぁに寛容な素晴らしい国やぞ』
『王カスはさぁ…』
『通報』
『通報』
『不敬罪で通報しますた』
『ごめんなさい許して』
やれやれ…こんなんでは姫殿下もお嘆きに…ん？
『【急募】一国の姫のワイ、国宝のひとつを無くしたので誤魔化す方法』
姫殿下もかい!!
三段落ちってレベルじゃーねぇぞ!!
でも、騙りの可能性も魔粒子レベルで存在するかもしれない…。
いやでもバレた時のデメリットがデカすぎるし、そんなことするなんて普通は…。
いやでも、この端末の秘密保持能力はかなりの物らしいし…完全に特定は流石に無いかぁ…。
「んん？」
そんなこんな、色々なスレを巡っていた時、一つのスレを発見した。
『今日仲間にパーティーを辞めてもらった件について』
「なぁんか親近感が湧くなぁ…。
いやでも、こう言うのはよくある話かもしれないし、どうしよっかなぁ…」
そんな独り言をこぼしていると…。

コンコン…。
部屋の扉がいきなりノックされた。
「あっはい…」
俺は思わず起き上がり、扉の方に視線を向ける。
「あと五分でお時間ですが、延長なさいますか？」
なんだ、受付の店員さんかぁ。ビックリしたぁ…。
でもなぁ…時間の延長だなんて、そんな…そんなこと…。
「二時間延長で…」
「かしこまりましたぁ～♪」
ハッ!!
気がついたら扉越しに自然と口が延長と言ってしまった!!
恐るべし…光喫茶…。

# 第４話

「すっかり遅くなったなぁ…」
光喫茶で思いの外時間が経っていたことに驚きつつ、俺は店を後にする。
周囲はもう暗く、夕飯時だ。
ぐぅぅぅぅ…。
「腹の虫も鳴り出したことだし、昼頃寄った酒場でメシにでもしようかなぁ」
そんなこんなで、やって来たのは酒場として営業している店。
入り口のスイングドアを開けて、適当な席に着く。
幸いまだ混み合ってはいないようで、二人から四人組の冒険者パーティーらしきグループがちらほらいるくらいか。
机に置いてあったメニューを開いて、手を上げる。
「はぁ～い、少々お待ちくだ～さ～い」
やって来たウェイトレスさんに注文をして、しばし待つ。
手持ち無沙汰に待つこと数分。
その時背後から怒声が聞こえて来た。
「ンだとコラァァァァ!!もっかい言ってみやがれぇぇぇ!!」
振り向くと、赤毛の日焼けした筋肉質な大男が似たような体格のスキンヘッドの男の胸ぐらを掴んでいる。
しかし、掴まれている方も興奮しているのかより挑発的なことを言う。
「ヘンっ!!何度でも言ってやるね!!」
いったい何をそんなに言い争って…。
「貧乳好きはロリコンと同じだってなぁぁぁ!!」
…いや、まぁうん。喧嘩してる人のうち、少なくとも片方は誰だかわかった気がする。
「だぁぁから!!貧乳は成長した結果として貧乳なの!!ロリが小さいのはあくまでも成長途中だから!!要はこれから大きくなる可能性があるわけでしょ!?そんなんが好きな連中といっしょにすんない!!」

「はぁぁぁん!?側からみりゃあ変わりゃしねぇよ!!素直にデカいのが好きって言えや!!」
「じゃかあしぃ!!今日という今日は…ってん?」
大男の片方と目が合う。
気のせいかと思ったら、本当に彼だったとは…。
「ゼニスくん!!ゼニスくんじゃーないかー!!」
「レイサムさん…まぁだそんなことやってたんですか…」
「がはは!!オイお前!!このゼニスくんはなぁ…俺と共に貧乳巨尻ダークエルフのおねーさんと結婚したい同盟を結んだ同士で…」
「そんな同盟、いつ結んだんで!?」
ガッシと肩を組まれる。
赤ら顔なヒゲ面から漏れ出る酒臭さ。
こりゃ結構呑んでるなぁ…。
ちなみに俺は好きになった人がタイプって人間だから、殊更にフェチズムを持ち合わせちゃあいないつもりだ。
レイサムさんも基本悪い人じゃ無いんだけど、酒が入ってたのとそう言う話題なのとで興奮してたんだろなぁ～。
まぁ相手を殴んなかっただけまだ理性的か?
いやでも、俺と目が合わなかったらどうなってたか…。
その後、俺の頼んだ料理が来たのを理由にレイサムさんからは一度離れることができたんだが…。
「よっこいしょぉ!!」
レイサムさん?何故俺の向かいの席に座る?
「オウ。ちょうどオメェに聞きてえ事があってよ」
「聞きたいこと・ですか?」
まぁ、大抵予想はつくけども…。
「噂で聞いたんだけどよ。オメェ、パーティー抜けたんだって?」
やっぱりその話題か…。
「ええまぁ、事実ですけど…」
「なぁ、もしオメェさえ良けりゃあよ。うちのパーティー来ねぇか?」
理由を聞かないのは親切心なのかなんなのか…。

「いや、冒険者稼業からはしばらく離れようかと思ってまして…」
幸いまだ蓄えはあるし、もうちょいゆっくりしてたいしなぁ。
「なぁんでだよ？オメェくれぇの実力者なら、むしろ欲しいパーティーばっかだろ？」
むしゃりと肉を頬張りながらそんなことを聞いてくる。
俺のことを心配して言ってくれてるんだろう。
あとそれ俺が頼んだやつな。
「いや、なんかやる気が起きなくって…逆に冒険者以外の生き方を模索してみるのも面白そうかなぁって」
本当にアテも何も無いけども。
「ほぉ～ん…だったらなおさらうちのパーティーに入っといた方がいいと思うがね」
食い下がるなぁ…。
「街から街へ移動する手形だって、個人よりもパーティーに発行される奴の方が効果もデカいだろ？」
いやまぁ…うん。それはそうなんだよなぁ。
「まぁでも、しばらくはこの街に滞在するつもりなので…」
「そうかい。そんじゃあ二週間後、俺らは出立すっからよ。気が変わったんならそれまでに声かけてくれや」
そう言って立ち上がり、元の席へと向かうレイサムさん。
結局俺の肉ほとんど食っていきやがってチクショウ。
あの人め…ちょっとだけ抜け毛が増えちまえばいいんだ。

# 第5話

うひょ～!!本当に異世界来たンゴ!!
あの何やら神を名乗る不審者のジジイからチート能力もたんまりもらったから、好き放題するやで!!
…まぁ、テンセー?テンイ?とかいうシステムそのものがまだ実験的な試みらしいから、ちょくちょく痒いところに手が届かない～みたいなことはあるって言っとったけども…ま、なんとかなるやろ。知らんけど。
勇者がやってきてから数年後……。
魔王をブッ倒す旅路…。
ぶっちゃけ割と余裕だから、テキトーに苦戦してるフリして資金援助を受けまくってやるンゴ!!
いやぁ～♪今日も今日とて娼館通いがやめられないンゴねぇ～♪
兵士の諸君もお役所仕事乙やでホンマ。
勇者が遊び呆けてから数ヶ月後……。
割と好き放題して、ぼちぼち飽きてきたンゴ…。
ぶっちゃけ、しばらく美人は見なくてもいいレベルで貢ぎまくったンゴねぇ～…。
暇つぶしに水晶でネットもどき作ったけど…流石に個人の魔力じゃシステム理論を構築するくらいで限界があるンゴ…。
ぶっちゃけ出来たのは偶然の産物だけども…。
本格的にやるってなると、色々と設備の準備もあるし、このままだとワイの新たなる夢…いや、野望が頓挫することになってしまうンゴねぇ…。
…こうなったら、夢の素材を探して寄り道しまくるやで～♪
魔王討伐?まぁなんとかなるやろ!!知らんけど!!
素材探しの旅に出て数週間後……。
おっ!!あの神殿のゴシンタイ?の大結晶って…。
ウヒョ～!!あれさえあれば、もしかしたらこっちでもネットが使え

るようになるかも知れん!!
…今神官たちは、祭の準備で最低限の警備を除いて誰もいないンゴねぇ～…。
だがこれも、ワイの野望のため…。
あとは、バレないようにちょっとずつ細工してけば…夢が広がりんぐやね～♪
よっしゃ!!おっちゃん、頑張るやで～!!
おっちゃんが頑張って数年後……。
アカンやで…神殿の魔力掠め取ってたのがバレたンゴォォ…。
まさか完成間近の喜びから、酒の席で酔っ払ってポロッと言っちまうとは…。
しかも、近頃は強い魔物も出てくるようになったとかで、神殿の守護の力が弱まったことが原因とか…。
最近魔王討伐サボり気味なのもあってか、周囲の視線が痛いンゴォォォ……。
いや、でもこっちの世界の連中はヌッスって言葉の意味は分からんみたいやし…。
せや!!ヌッスって言う特別な儀式を行なって水晶を清めたり～とかってことにするンゴ!!
それをワイにしか出来ん特別なものって位置付けにすれば、仕事で手一杯ってことにも出来て一石二鳥やんけ!!
魔王討伐?まぁなんとかなるんでない?
おっちゃんのめちゃくちゃ苦しい言い訳から数日後……。
みんなのためって言えば大抵のこと許容してくれるとか…異世界人チョロすぎワロタ。
だが、ここまで来ればワイを止められる人間はいない!!
目指せ!!夢のネット社会やで～!!

# 第6話

宿屋で寝泊まりして、荷造りをしていた。
武器と防具の手入れよし。
サイフよし。
魔力…よし。
荷物袋に穴は…空いてないな、よし。
「さて、今日はどこに行こっかなぁ～…」
どうせ暇人だし、この際色々と珍しい経験をしてみるってのもアリっちゃあアリだなぁ～。
「ゼニスさぁ～ん!!お客様がお見えですよ～!!」
「あっ、は～い!!今行きます～!!」
むっ?どうやら思わぬ来客が来たようだ。
レイサムさんの言う刻限まではまだ普通に猶予はあるはずだけど…。
そんなことを思いながら、宿屋の受付に向かうと…。
「おっす～ゼニスっちゃ～ん」
「ひ…姫殿下!?」
ゆったりとしたローブからチラリと見えるあのシンプル且つ歴史の重みを感じさせる籠手は…正直見間違えようもない。
「冒険者やめたらしいなぁ～、探したんだぞ～?」
最近流行りの刺繍の入った黒いローブのフードを外してそう言う彼女は、想像した通りの人物だった。ちくせう。
血のように真っ赤な髪を邪魔にならないようにショートボブにして、翡翠の瞳をニヤリと細めて不敵に微笑むのは拳の王家の姫殿下…フィスティア様だ。
彼女の王家は元々、古代王国の武芸者集団の長を務めた一族であり、その影響もあってか自衛のために幼い頃より厳しい鍛錬を積んで来たらしく、多分彼女と互角に渡り合えるのは上位冒険者の中でも更に一握りだろう。
かつて魔王軍がこの国に攻め寄せて来た時も、彼女らのご先祖は一

丸となり拳で抵抗して、何度となく危機を乗り越えて来たとか…。
「いやぁ～、実はついこないだ、国が運営してる採掘場から岩盤に突き刺さった籠手が見つかってさぁ～。ウチの武芸者連中やら冒険者達に頼んで、色々と手を尽くしたんだけど…誰一人として引き抜けなくってねぇ～…」
へらへらと笑いながらそんなことを言う姫殿下。
顔がいい分タチが悪いな全く…。
「っていうか、どんだけ深く突き刺さってんですかソレ…」
「ああ～…ソレなんだけど、ウチの国の文献にも何も記載されて無くってさ～…」
「あ、そうなんスか…」
っていうか、岩盤って…どんな馬鹿力だよ。
多分岩盤に突き刺さってたってことは、もう先端部分は錆びてたりしてそうだし…。
下手したらポッキリ逝きそうなら、そりゃあ誰にも引き抜けんでしょ。
歴史的に重要なものだったりしたらほぼ間違い無く首が飛びそうだから慎重にやらざるを得ないだろうし…こわぁ～…。
「ま、ともあれ…だ。冒険者やめて暇なんだろ？ちょっとツラかしてや」
「あの…拒否権は…」
「オウ別に逃げてもいいけど、アタシが捕まえたら新技の実験台な」
ポキポキと指を鳴らしながら笑顔でそう言う姫殿下。
目が…目が笑ってないッ…!!
「あっハイ…」
権力と言うか、拳力というか…。
色々と強い人が直接来るとか、厄介なことこの上ないんだよなぁ～。
って言うか、この人オレがパーティーにいた時も何かにつけて絡んで来て…。
アレか？支援魔法で何とか耐久したのがいけなかったのか？

チクショウ。相手が姫殿下じゃなかったら寝癖がなかなか治らない呪いの一つでもかけてやるとこだよまったく…。

# 第7話

既に宿屋の前に来ていた王家の紋章のついた馬車に乗って、俺と姫殿下は現場にそのまま移動することとなった。
俺の正面に座る姫殿下は何ともふてぶてしく腕組みをしている。
しかし…その隣に座って物々しい雰囲気を醸し出す護衛の人物は確か…。
「お、気づいたか？」
姫殿下は悪戯が成功したかのように笑みを深める。
「えぇ。確かこの方はコロシアムの…」
後頭部で雑に結ばれた銀髪に、つり目がちな瑠璃色の瞳。
たしか、前人未到の百連勝を達成したっていう血拳の……。
「おう。ソイツであってる。アリアだ」
「驚きました…思っていたよりもお若く…」
姫殿下は自慢げに彼女の肩をバシバシと叩く。
が、当の本人は大岩を叩いているかのようにびくともしない。
まぁ、下手な護衛は却って姫殿下の足を引っ張ってしまうだろうし、人選自体は間違ってないだろう。
拳の王国は女傑が多い。
その根拠というのが…まぁ、神話や伝説の類の話にはなるが…嘘か真か、その昔、かつてここらはアマゾネスとか言う女性民族の棲家だったらしく、ある日勇者なる人物がここに訪れて、歓待の礼にとある霊薬を当時の長に渡したとか。
その影響なのか、時折先祖返りとも言うべき凄まじい強さを誇る女性が生まれ、やがて古代王国が滅びた折、屈強を誇る彼女達の子らが現在の王家の祖になったとか…。
そんなことを考えていたら、俺たちを乗せた馬車が止まる。
どうやら目的地に着いたようだ。
「…お、着いたな」
馬車の幌を開け、護衛であるアリアと共に姫殿下は降りる。
「そんじゃあ…逃げんなよ？」

何故だか目を光らせる姫殿下。
俺ってそんなに信用無いのかねぇ…。
「わかってますよ。流石にここまで来たらお手伝いさせていただきますって…」
ここが例の鉱山か…。
国が運営しているだけあって、設備も人手も段違いに多い。
時折通りすがる鉱夫たちに、挨拶されては「オウお疲れさん」と返す姫殿下は、どこかカリスマ性があるようにも思えてくる。
…まぁ、俺に対しては毎度毎度会うなり連れ回そうとしてきてばっかりで…まぁ、体のいい何でも屋扱いなんだろうけどもなぁ…。
そう思いつつ、俺は姫殿下に案内されるがまま昇降機に向かい歩くのだった。
今から遙か過去の出来事……。
ひぃ…ひぃ…。
し…搾り殺されるかと思ったンゴ…。
何やねんアイツら!!底無しってレベルやないで!!
ワイとしたことが三人目でギブアップとは…情けないンゴォォォ…。
と、取り敢えず謝礼の品として『英傑の霊薬』を連中にくれてやったが…意外と喜んでたわ。
チョロすぎワロタ。
まぁ、効能の方は、何世代かまたいだ先で優れた人材がポンポン出てくるって言う眉唾モンやけど…。
まま、ええやろ。
ワイはここにはもう二度と来ん予定やし、どーせ効果が現れる時にゃあワイは生きとらんやろし。
それよりも大事なのは今やろ今!!
さ～て、娼館のみんなに癒してもらいに行くンゴね～♪